

学 会 記 事

第13回新潟周産母子研究会

日 時 平成13年 7 月28日 (土)
午後 2 時
会 場 新潟大学医学部
第五講義室

一 般 演 題

1 妊娠36週, 胎盤早期剥離の疑いにて開腹した, 小腸憩室穿孔の一症例

加藤 龍太* (新潟こばり病院) 産婦人科
長倉 成憲・加藤 清 (同 外科)
* 現, 新潟産科婦人科クリニック

症例は26歳の初産婦。当院にて健診を受けていたが妊娠経過は順調であった。

平成11年 6 月15日 (妊娠36週 0 日) 夜, 3 ~ 5 分毎の腹痛を主訴として来院されたが, 疼痛部位は左上腹部に限局しており, CTG 上も腹痛は子宮収縮と同期せず発来していた。胎児の状態は良好と判断され, 内診所見では子宮口開大 1 cm。血液検査所見は白血球数 10600 /ml, 血色素 10.5 g/dl, 尿中潜血反応陰性, 腹部超音波検査では腹腔内出血および胎盤剥離所見を認めなかった。

経過観察としていたところ, その後数時間で腹痛は腹部全体に拡がり増強, 板状硬となり嘔気出現。分娩進行の所見なく, 胎児心音は良好に聴取されていたが, 子宮・腹腔内で何らかの重篤なトラブルが起っている可能性が高いと判断し緊急開腹を行った。急性腹症の原因は小腸憩室穿孔であり, 帝王切開にて児を娩出した後, 外科チームにより小腸部分切除が行われた。術後は順調に回復され母児ともに退院された。

妊娠中の急性腹症における術前診断の困難さを痛感した他, 妊娠子宮を温存した手術が可能であったか, 産科診療所での対応はどうすべきか等, 考えさせられた症例であった。

2 当科における品胎妊娠の臨床報告

東野 昌彦・岡田 潤幸
小島 由美・八幡 哲郎
石井 史郎・倉林 工 (新潟大学)
高桑 好一・田中 憲一 (産科婦人科)

[目的] 当科における品胎妊娠の現況の報告。
[対象] 1994 年 1 月から 2001 年 6 月の間に当科で分娩となった品胎妊娠20例 (妊娠初期流産症例は除外)。
[結果] 品胎妊娠の周産期予後として以下の結果を得た。①在胎週数, 入院日数, 子宮収縮抑制剤の経静脈投与日数の中央値は各々35週 3 日, 69日, 29日であった。②15%の症例に重症妊娠中毒症, 血液凝固異常, 呼吸障害の合併症を認めた。③極低出生体重児, 超低出生体重児の出生率は各々18.6%, 3.3%であった。④40%の妊婦において最大児と最小児の出生体重差が25%以上認められた。⑤胎児死亡もしくは早期新生児死亡および先天異常症の発症率は各々3.3%, 8.3%であった。

3 胎内診断に苦慮した胎児片側囊胞腎の一例

三井 卓弥・倉林 工
鈴木 美奈・永田 裕子
相田 浩・石井 史郎 (新潟大学)
高桑 好一・田中 憲一 (産科婦人科)
松永 雅道・佐藤 尚 (同 小児科)
内山 聖
羽田野彰彦・筒井 寿基 (同 泌尿器科)
志村 尚宣

妊娠25週に発見された胎児腹部囊胞性腫瘍に対し, 内容穿刺による胎内診断を試みるも, その診断に苦慮した胎児片側囊胞腎の一例を経験したので報告する。

症例は32歳, 1 妊 0 産。ICSI にて 2 絨毛膜性双胎妊娠成立。妊娠25週, 妊婦健診時に, 第 1 児の腹部に約 6 cm 大の腫瘍, 仙骨部に髄膜瘤を認め, 腹部腫瘍の増大傾向を認め, 妊娠28週管理入院とな